

(外国語活動)

## 外国語活動を通してコミュニケーションを楽しむ児童の育成

大阪市立玉川小学校 大村 利佳 田村 真生

### 1. 研究主題設定の理由

本校では、「心身共に健康な子どもを育てる」という教育目標のもと、児童の実態を踏まえ、「『た』体力・活力のある子ども」「『ま』学ぶ喜びを味わう子ども」「『が』学校・家庭・地域を大切にする子ども」「『わ』和を大切にする心豊かな子ども」をめざす子ども像として教育活動に取り組んでいる。平成26年度、27年度と国語科を研究教科としていたが、平成28年度より児童が楽しく積極的に外国語活動に取り組むことができるように研究主題を設定し外国語活動を重点的に研究することにした。そして、本年度は新学習指導要領の目標に沿って、各学年の実態に応じながら児童にできるだけ多くのコミュニケーション（自己表現活動）の機会を提供できるような活動を進めてきた。

### 2. 研究の趣旨

平成26年度、27年度と国語科を研究教科として児童が自分の考えや思いを交流することを中心とした言語活動を研究してきた。その成果をもとに、さらにこれまでの素地のあった外国語活動でもコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目指すこととした。しかし、それと同時に教員の外国語活動へ対する自信のなさも浮き彫りになってきた。そこで、児童たちが主体的に外国語活動に楽しんで取り組み、また、教員も外国語活動の中で楽しさが見出すことができるような活動を取り扱った研修会や研究授業を重ねることで相乗効果が見られると考えた。そして「小学校低学年からの英語教育」として全学年週3回外国語の短時間学習を行うことで、気付きや慣れ親しみの構築化ができると考えた。

### 3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

#### (1) コミュニケーション能力の素地を養うための工夫

- ・ 言語や文化について体験的に理解が深まるように工夫し、外国語の音声に慣れ親しみ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする交流活動を取り入れる。
- ・ 『Good voice』『Smile』『Eye contact』の3つのスローガンを意識させ活動を促す。

学年目標

学 年	目 標
低学年	外国語活動への興味付けを高めるため、体験的に「聞く」「動く（動作化）」を中心とした言語活動を工夫する。
中学年	外国語活動への動機付けを高めるため、体験的に「聞く」「話す」を中心とした言語活動を工夫する。
高学年	中学年から高学年、高学年から中学校へと学びの連続性を持たせながら「聞く」「話す」ことを扱う言語活動を通じて基本的な表現を使いコミュニケーション力を養う。また、「読む」「書く」ことに慣れ親しみ積極的に英語を読んだり書いたりする態度を育成することを目指す。

## (2) 教材教具の開発環境整備

- ・ 歌やチャンツ、アクティビティなどの教材を工夫する。
- ・ 絵カード、ICT 機器などを使用した視聴覚教材を開発し活用の仕方を工夫する。
- ・ 「読む」「書く」活動についての教材教具の研究開発

## 4. 研究の成果と今後の課題

### (1) 研究の成果

- 低学年から「聞く」ことを重ねると耳から聞いた英語の音をそのまま発音しようとする姿が見られ、低学年から外国語活動に取り組むことの良さを実感することができた。
- 低学年では、歌やチャンツ等を繰り返し聞いたり言ったりすることを通して、英語のリズムや音声に親しみ楽しんで活動する様子が見られた。また、音をインプットするときにそれに関わるジェスチャーも考え取り入れることでより一層慣れ親しむことができた。また、アルファベットに慣れるために、文字の形作りやゲームを取り入れて活動を重ねてきた結果、アルファベットへの関心が高まり、写して書いてみたいという思いを持つ児童が増えてきた。
- 中学年では、児童の興味・関心が高まる教材やワークシートを工夫したことで、児童が楽しみながら英語を使ってコミュニケーションを図ることができてきた。また、活動内容に合わせたチャンツや歌などを取り入れたことで外国語の時間を楽しみにする児童が増えてきた。
- 高学年では、C-NET と担任との授業を通して、児童が楽しみながら英語の音声や表現に慣れ親しむことができ、外国語活動に積極的に取り組む児童が増えてきた。また、簡単なクラスルームイングリッシュを繰り返し使うことで、英語を話そうとする意欲が高まるとともに、児童が英語で活動内容を理解しようとする態度が育ってきた。活動の中で、C-NET や担任に対して児童が今まで習得した英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度も育ってきた。短時間学習の時間や余剰の時間を利用し、アルファベットや簡単な単語、音声で慣れ親しんだ文章表現を書き写す活動を取り入れることで、フォニックスの知識を使って自分の力で進んで読もうとする態度が育ってきた。
- コミュニケーションを図るときに相手に聞こえる声「Good voice」で相手を見て「Smile」「Eye contact」を1年生から意識させた活動を行ってきたので、外国語活動以外の場面でも自分の思いを伝えるときに活用でき積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が見られる。また、ジェスチャーを使うとより相手に伝わりやすいことも経験できている。

### (2) 今後の課題

- 1年生から6年生までの系統的な指導計画をより具体化にし、児童の実態に応じた指導計画を立てて実践していく。
- 英語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さや楽しさを実感できるような活動を工夫する。その際、児童にとって身近なコミュニケーションの場面設定を工夫し、児童の発達段階に応じた表現を用いるようにする。
- 活動の反省と次時の活動の展開への改善及び工夫のため、振り返りカードを効果的に活用する。
- 今後もタブレット等の ICT 機器を活用し、学習効果を高めるための学習活動のあり方についての研修会や講習会を行う。